



虹色

＝発行＝
秋田県生涯学習センター
〒010-0955秋田市山王中島町1-1
TEL:018-865-1171
FAX:018-824-1799
E-mail:sgcen002@mail2.pref.akita.jp
編集：社会教育アドバイザー

秋田県家庭教育&早ね早おき朝ごはんフォーラム 食生活は家族の未来への投資です！ 子どもたちを健やかに育む家庭料理を…

家庭・地域・学校みんなで子育てについての理解を深め、子どもの生活リズムを向上させることを目的とした平成24年度秋田県家庭教育&早ね早おき朝ごはんフォーラムが、11月17日(土)、生涯学習センターを会場に開催されました。「人のために何かしてあげたい気持ち、家庭の味、当たり前身の近なことを話したい」と仰る料理研究家の土井善晴氏による基調講演の一部を箇条書きでご紹介します。

○和食の原則は「素材そのものを食べる」、「素材を生かす」、「加工度の低い調理である」ことである。

○作法・しつけはそれなりの意味があること。お茶碗を手を持つのは、自然からの恵みであるお米だからとも考えられるし、手の感触で器を味わう楽しみも生まれる。

○柳の祝い箸で食べるのは、柳がたわむことから強い精神にと願ってのこと。田植え時、朴葉飯にきな粉をかけながら「稲の花が咲きますように」と唱えるのも、言霊を信じる日本人の自然に対する礼儀正しさの表れである。



どんなつらいことがあっても ご飯を炊いてください。作っている音、ほっかほっかと美味しい香りで元気が出ます。

○「一汁一菜」のシンプルな食事。シンプルであることは美しくもあり、飽きない。また、同じことの繰り返しであるからこそ、食材の違いや味付けの小さな変化に気付く心が育つ。

○「春は芽のもの」、「夏は水もの」、「秋は実のもの」、「冬は根のもの」。旬を美味しくいただける、安心していただけるのが日本！

和食の素晴らしさは、いつも自然とともにあって裏切らないこと。和食を知って、暮らしに生かして、伝えることが未来への希望と信じます。

秋の夜長を家族で折り紙…

2012年のカレンダーも残り1枚となりました。写真は、生涯学習センター展示ホールで紹介された数々の折り紙作品の中の一つ、毎日が楽しくなるような『(仕掛け)折り紙カレンダー』です。

月2回(第2・4木曜日 10:30～12:30)、アトリオン6階オープンスペースで開催される教室には、おしゃべりをしながら翌月に飾る作品づくりを楽しむ女性が集まります。季節の花々を主な題材にしていますが、この時期は、クリスマスツリーやお正月の箸袋にも挑戦するそうです。秋の夜長、お母さんとお子さんと一緒に来る年の夢を語りながら折り紙を楽しむのもいいですね。

【お問い合わせはアトリオンハーモニープラザまで
電話 018-836-7853】



県中央男女共同参画センター
「大人の折り紙展示会」から

読書の習慣は生涯学習への第一歩に・・・

こどもたちよ

私がお前たちに遺してあげられるものは、あまりにも少ない。

兄弟喧嘩も起こらないほどの僅かな財産と、

正直なだけが取得の血筋、何枚かの写真。

そして書棚の古びた本と、読書を苦痛に感じない習慣

伝えるものはそれがすべてだ。

地位や名誉が欲しければ自分で手にすればいい。

愛もまた同じだ。

それは私が遺してゆくものではない。

自分で考える。自分で選べ。自分でいきろ。

そのために必要なことは教えてきた。

ただひとつだけ言っておこう。

読書を怠るな。

もちろん本からの知識がすべてだとは言わない。

多くの人と出会い、経験を重ねることによって、人は真に成長する。

時には書を忘れ酒盃をくみかわすのもいい。

しかし読書は怠るな。

想像の翼を持たない者は、いつまでも夢に届かない。

幸いにお前は、インクの染みのような活字の羅列から

物語を想像する力を持っている。

小さい頃、寝床で本を読んで聞かせること、お前は目を輝かせていた。

その頃の興奮を忘れないでほしい。

子どもの1ヶ月当たりの読書量に関する全国学校図書館協議会・毎日新聞社の調査(24年度)があります。平成10年以降は増加傾向を示したものの、今は横ばい状態で小学生が10.5冊、中学生が4.2冊、高校生は1.6冊となっています。

「子ども読書の日」の制定や朝読書の推進など国や県・市町村、学校での様々な取組、図書館の環境改善等が効果を上げてきたことをうかがわせる調査結果です。また、「家にたくさん本を置いている」、「保護者が図書館に連れて行く」といった家庭に、読書好きの子ども割合が高い傾向にあります。

さて、上記の詩「こどもたちよ」は、現在、秋田市のK書店の雑誌袋に印刷されています。

使い始めた当初、書店には、誰の作品であるかとの問い合わせが続いたそうです。2008年には、秋田魁新聞の「見聞記」でも経緯が取り上げられ話題になったようですが、作者は、東京都在住の茨田晃夫氏です。詩は、1988年の読書推進キャンペーンに合わせて、ポスターとして店頭を飾っていたとのこと。その後、K書店主は「もっと多くの人にこの詩を広め、読書の楽しさを発信したい」との思いを抱き、思いを伝える媒体として、書籍を入れる封筒である雑誌袋への印刷を申し出たそうです。以来20数年、いったい何人の方にこの詩が読まれたことでしょうか。詩に込められたメッセージが次世代に伝わり、子どもたちの生涯学習への第一歩になることを願っています。

10月20日(土)秋田県読書フェスタが開かれました。



生涯学習センターで、自主企画グループ「あきたエコマイスター」のボランティアにより木の葉のしおり作りを楽しんだ子どもたちです。

